

演題番号：2

演題名：牛の膵臓の腫瘤

発表者名：○沓澤史絵 阿左美有右 嘉数明日香 中村正治

発表者所属：中央食肉衛生検査所

1. はじめに

牛の膵臓由来の腫瘤には膵臓外分泌腺腫瘍、膵島腫瘍、過形成などがあるが、と畜検査において遭遇することは稀である。今回、牛の膵臓に腫瘤を認める希少な症例に遭遇し、病理組織学的検索を実施したので、その概要を報告する。

2. 材料および方法

症例は平成24年3月に当所管内A食肉センターへ一般畜として搬入されたホルスタイン種、216ヶ月齢の雌であった。生体検査では特に異常は認められなかったが、解体後検査において、膵臓に腫瘤が認められた。その他の所見として、膵実質に膵蛭の寄生がみられ、肝臓に濾胞が認められた。採材した腫瘤を10%中性緩衝ホルマリン液で固定後、常法によりパラフィン切片を作製しHE染色を行った。特殊染色はグリメリウス染色、ヘルマン・ヘルストローム染色、ゴモリのアルデヒド・フクシン染色（井上の変法）を行った。免疫組織化学染色は抗ケラチン/サイトケラチン抗体(AE1, AE3)、抗クロモグラニンA抗体、抗インスリン抗体を使用して行った。

3. 結果

(1) 肉眼所見：腫瘤は12cm×10cm×8cm大で、周囲は一部結合織が発達していたが、多くの部分において膵実質との境界は不明瞭であった。断面は乳白色あるいは赤色～暗赤色充実性で、結合織によって区画されていた。

(2) 組織所見：腫瘤部は、腫瘍組織が充実性ないし島状に拡がり膵実質の大半を置換し、境界は不明瞭であった。さらに周辺の結合組織や末梢神経内への浸潤がみられた。腫瘍細胞は間質に少量の膠原線維を伴いながら胞巣状充実性に増殖していた。これらの核は淡明な大型円形～卵円形で明瞭な核小体を数個入れているものから、ヘマトキシリンに濃染する小型のものまでみられ、核分裂像も散見された。また、細胞質は弱好酸性で広く、いずれも微細顆粒状を呈していたが、チモーゲン顆粒は認められなかった。特殊染色はグリメリウス陰性、ヘルマン・ヘルストローム陰性、アルデヒド・フクシン染色陽性を示した。免疫染色ではケラチン陰性、クロモグラニンA陽性、インスリン陽性を示した。

4. 考察およびまとめ

本症例は腫瘍細胞の増殖様式や形態および各種染色の結果から膵外分泌腺腫瘍は否定され、膵島腫瘍のインスリノーマと診断された。牛におけるインスリノーマの発生は稀とされている。その背景には、腫瘍が発生する年齢に達する前にと殺されること、複胃動物であり主なエネルギー源が揮発性脂肪酸であるため低血糖による症状が発現し難いことに加え、数mm大の小さな腫瘤はと畜検査で発見し難いことなどがあると推察される。本症例は高齢で腫瘤も大きかったため、偶発的に発見できた希少な症例と考えられる。